

Newsletter

May 2018

<http://www.aack.or.jp>

目次

笹ヶ峰ヒュッテ改築のころを想う 田中二郎1	第45回、第46回雲南懇話会のご案内14
剱岳大量遭難救出劇 渡辺良男4	会員動向14
高校生と教師が創った山岳部60年 上田 豊9	編集後記14

笹ヶ峰ヒュッテ改築のころを想う

田中二郎

老朽化した笹ヶ峰ヒュッテを建て替えなければならぬという話は、左右田健次（ガンコ）さん、岩坪五郎（ゴロー）さんが山岳部長をしておられたときからあり、お二人もいろいろと思案しておられたようである。岩坪ゴローさんが1997年3月末の定年退官と同時に山岳部長を辞されることになって、「おいジロー、山岳部長の後任はお前がやれ。ヒュッテ改築の資金は我々まわりのOBがなんとかするから。」そうやって私に決断を迫ったのは、2年先輩の笹谷哲也（ベベ）さんであった。山岳部長、ヒュッテ改築委員長田中二郎の名前を据えておけば後は何とかする、という甘言に釣られて引き受けたのであるが、実際に改築事業に取りかかってみるとやるべきことは山のようにあった。

当初3千万円ぐらいで改築は可能だろうと見込んで、この資金をいかにして集めるか、関西在住の身近なOB連を中心に集まって作戦会議を何度も重ね、外部からの募金には頼らず山岳部OBでなんとか出しあって資金を作ろうということで話は落ちついた。

当時のAACK会長は3年先輩の上尾庄一郎さんだった。上尾さんはもう1年先輩の村上正

康（ペコ）さんが住友林業株式会社常務だったので彼と相談して、住林住宅本部の技術者数名に依頼し、ヒュッテの現状視察・検証をしてもらうことになった。何時間も床下から天井まで精査してもらった結果、「建物は土台が腐食していて倒壊の危険もあり、全面的に建て替える必要がある」との結論が出された。

山岳部は体育会に属しており、ヒュッテの実際の管理運営は山岳部がおこなっているが、名



写真1 ヒュッテ改築前の笹ヶ峰会総会の際の記念写真



写真2 1999年7月3日、改築のため、旧ヒュッテを解体、撤去するところ



写真5 1999年10月27日、改築工事はほぼ終了し、最後の内装にかかっている



写真3 1999年7月4日、地鎮祭、起工式で鋤入れをする改築委員長



写真4 改築途中、およその骨組みができた状態

目的には国有財産として京都大学に所属しており、管理責任は経理部管財課および学生部学生課におかれている。そこで住友林業住宅本部に

よる「危険建物であり、全面改築を必要とする」旨の報告書をもって学生部と経理部の説得にあたり、了承を取りつけなければならなかった。

ヒュッテの建つ妙高山塊から山麓の笹ヶ峰一帯は国立公園に指定されている場所なので、松本から上高地線の道路を少し西に入った環境庁自然保護局中部地区国立公園・野生生物事務所までヒュッテ改築の許可を取りつけに行かなければならなかった。国立公園内ではいかなる構造物も基本的に変更してはならないことになっているので、建て替える建物は旧来のものとまったく同じ色、形のものを同一地点に再現すべしと念を押され、倒壊のおそれある老朽化したヒュッテの建て替えを承認してもらった。上尾さんの同級生で環境庁OBでもある藤野一成（ゴンパチ）さんに事務所まで同行してもらい、また、同じ同級生で建設省河川局長を経て参議院議員となっている岩井国臣さんから環境庁に口添えをしてもらって話はスムーズに進んだ。

肝心の建築資金については、山岳部員以下OB諸氏を合わせて拠金してくれると思われる人は約400人、元は山岳部から分派した探検部の有志、さらに日本山岳会京都支部の有志の方々もヒュッテを利用して多少の援助はしてくれるであろうと協力方の呼びかけをすることになった。予定額の3千万円を400人で割ると、一人平均7万5千円となる。実際には10万円以上寄付してくれる人はそれほど多くないだろうから、会社社長や役員、開業医、資産家など、お金持ちの人たちから大口の寄付をお願いしなければならないだろう。一方でそれぞれの学年



写真6 1999年11月6日、新しいヒュッテが完成し、竣工式を終えて全員の記念写真。半地下のコンクリート基礎と1階の200人乗っても大丈夫という張り出しベランダが小沢ボンタさんの自慢の作である

ごとに責任者を選んで、自分たちの年代ならいくらぐらい出すべきかを相談してもらったうえで、広く趣意書を配布して、あとは各自の判断で自主的にご寄付をお願いすることにした。最高は300万円、最低は3千円と大きな開きはあるが、大口、それに中口の寄付が予想以上に多く寄せられたおかげで、最終的に集まったお金は450名ほどの方々から5千8百万円近くにも達することになった。OB諸氏の若き日を過ごしてきた笹ヶ峰ヒュッテに対する懐かしい想いと新しいヒュッテの行く末を暖かく見守ってゆきたいという愛情に満ちた願いがここには込められているものと思われた。

さて具体的に建築に取り組もうとすると、山岳部員やOB内部でも様々な議論が飛び交った。なかでも最も大きな争点となったのは、70年にわたってランプの宿として使われてきたヒュッテに改築を契機として電気を入れてはどうかということであった。結局、生鮮食品の保存のための冷蔵庫を備えて衛生面の安全を図り、電灯をつけ、最低限の家電製品を導入し、古き山小屋の近代化を果たそうということで合意がなされた。

妙高高原駅の近くにある、この辺りでは大手の総合建設業者、株式会社中電産業の工場長を3年後輩の増田和生（エッチュー）君が務めている伝手もあり、建設工事はこの会社に頼むことになった。建設にあたっては、笹谷ベベさんの同級生の小澤良夫（ボンタ）さん、原田道雄（エースケ）さんが献身的な努力を重ねてくださった。予定していた額の2倍にも近い寄付金を得て「うわー、えらいこっちゃ、皆さんの好意と期待に応えて、ものすごい立派なものを作らんらんで」と上尾さん、笹谷ベベさん他われわれ一同、事務局の吹田啓一郎（ゲロペー）君、伊藤宏範（クルンパ）君、竹田晋也（スイッチョン）君を含めて、みな襟を正し、腰を据え直したものである。小沢ボンタさんは（株）日建設の常務だったので、毎週末のように現場に通いつめ、設計とコンクリート基礎工事の指揮をしてくださった。原田エースケさんはアルミ製品を主に扱う（株）日本アルテックの創業者、社長として、頑丈な扉、二重ガラス入りの窓、黒姫山を望む正面の壁面には壁いっぱい巨大なガラス窓をドイツから直輸入して据え付けてくださった。当面の予備費はとっておいて、潤



写真7 岡山紘一郎 妙高高原町町長の音頭取りで行われたヒュッテ近くの雪山讃歌碑設置の式典に参加した笹谷哲也、横山宏太郎、田中二郎、羽根田博正（手前から）が、できたてのヒュッテ看板の前に並ぶ

沢な資金で立派な3階建ての山小屋を作り、1階台所の食器棚と半地下ともいえる洗面所には高尾文雄（マッコー）君が勤務する会社で作られた人工大理石を壁面に貼りつけてもらった。

北陸自動車道を通ることが多かったが、稀には中央自動車道から長野を経由して上信越道の妙高高原町へ、そして笹ヶ峰高原の建設現場まで、京都から何度往復したことであろうか。1999年7月4日に執り行われた地鎮祭、起工式から4ヵ月、秋も深まった11月6日ようやく完成したヒュッテの前の芝生の庭で宮崎昭副学長にも列席してもらって盛大な竣工式が執り行われることとなったのである。

紙面の関係もあって、すべての皆様のお名前を挙げることはできなかったが、2年以上もの年月をかけて新しいヒュッテがこれほど立派に出来上がったのは、450名以上もの方々の温かいご厚志と多岐にわたるご協力があったからこそである。20年近い歳月を経たいまになってからではありますが、京都大学笹ヶ峰ヒュッテ改築委員長として、ここに改めてお礼を申し上げる次第です。

劔岳大量遭難救出劇

渡辺良男

2004年に（2005年に再放送）、NHK番組「プロジェクトX」で「魔の山大遭難・決死の救出劇」が放送された。内容は1969年正月に劔岳周辺で発生した大量遭難に対する富山県警山岳警備隊の活躍を描いたものである。この時、富山県警山岳警備隊が救助に向かったのは最初に救助要請を出した赤谷尾根パーティである。山岳警備隊は赤谷尾根だけで手一杯であり、その後次々と出てきた劔岳からの救助要請には手が回らなかった。そのため劔岳には遭難パーティの留守部隊だけで救助に当たった。「救出劇」からまもなく50年、改めてこの救助活動に参加した一員として当時見聞きしたことをメモをもとに述べようと思う。ただ如何せん50年も前の話であり、当時の現場での情報も結構混乱していた部分があることは御容赦いただきたい。

1969年1月5日

私は、この年の正月休みは高田（現上越市）

に帰省していた。12月31日夜から降り出した雪は本格的なドカ雪となり1月2日夜には170cmほどの積雪になった。昭和38年（1963年）の三八豪雪に匹敵する大雪である。3日にはあちこちの家で高田名物、雪降ろしが始まった。鉄道は大混乱で、大幅な運転規制がなされた。4日になると雪は小降りになり列車ダイヤもだいぶ回復しはじめ、5日にはほぼ正常に回復する予想と発表された。そろそろ京都に戻らなければならなかったのも、ほっとした。ところが5日朝のニュースで、北陸線で早朝、雪崩が発生、貨物列車が脱線、北陸線は富山・直江津間で不通になっていると伝えられた。やむなく長野に出、中央西線経由で京都に戻る。そして京都に夕刻、やっとこさたどり着いた。

下宿に着くと、「すぐ山岳部に電話してください。」とのこと。やったか！慌てて自転車に乗り部室へ行く。すでに何人か部員が来ていた。「なんや、どこがやったんか?」。「あわてるな、

まだ遭難したんじゃない」。富山県警から電話で京都留守本部に入った連絡は以下の通りであった。「別山尾根から剣に向かって京大パーティが、剣頂上で立ち往生していた他のパーティに食料を分けたため食料が乏しくなったという。他パーティからは救助要請があったが、お宅のところも救助隊を出してもいいんじゃないでしょうか。」という婉曲な出動要請であった。この頃、剣岳に冬に入山するパーティはトランシーバを携行することが義務付けられていて、県警山岳警備隊本部と通信することができるようになっていた。オヤマパーティの最終下山予定日は9日であるから、彼等がどれだけ食料を分けたかは分からないが、まだ余裕があるはずである。しかしこのドカ雪では直ぐには下山できないだろうから救助に行ったほうがよいだろう、それに他ならぬ富山県警からのお話でもあるので、ともかく救助隊第一陣を出そうということになった。

このような状況であったから、さして緊張感はなかった。ともかく24時49分の富山行き夜行に乗るということで、テンヤワンヤで準備が始まった。汽車賃を払う金がないと言い出す者もいて立て替える。木村OBをリーダーにして人を集める。私にも行けという。なにせこの1年間、山から遠ざかっていた自分である。道具はあらかじめ同僚に貸してしまっていて、手元にはほとんどない。他の部員から借り集めて支度をする。京都駅に着いたら同学年のハラが東京から用意万端で着いていた。新幹線はすごい。東京で連絡を受けてから装備を整えて間に合うのだから。救助隊は木村OBリーダーのもと、ハラ、天外、ホッテン、三田村、私の計6名で出発した。

1969年1月6日 雪

富山は大雪であった。富山地铁に乗り換え上市に着き、警察署へ行く。署内は県警から連絡を受けて集まってきた各パーティの人であふれていた。なかなか容易な事態ではないことがおぼろげながらわかってきた。剣頂上付近に現在4パーティ、21名が孤立しているという。そしてR山岳会の2名が東大谷に転落、行方不明とのこと。剣一帯では五百数十名が入山しており（この数字は多分、この冬、富山県警に出された登山届の人数総計であろう）、そのほと

んどが孤立していて救助を要請しているとのことであった。史上前例のない大量遭難発生である。K山岳会の入道頭の方が大声でぶっている。曰く「こんな天候では下手に救助に向かっても二重遭難の危険性がある。ここは天候回復を待つべきである」。冬の剣に登ろうというパーティは、その山岳会の一線級で構成されている。それが遭難したのである。規模の小さい山岳会では、残っている会員で組織できる救助隊はまさに二線級でしかない。ビビるのは無理からない。バスで釈泉寺まで行き、ここから雪の中を歩きだす。R山岳会パーティと抜きつ抜かれつである。K山岳会は後からしぶしぶついて来る。大丈夫なのだろうか。湿雪に濡れて伊折についた。すでに14時近かったが馬場島に向けて出発する。1時間ほど前に他のパーティが通ったはずなのに、道は雪ですっかり埋まり踏み跡が分からない。うかつに踏み跡を外すと腰までもぐる。すさまじい降雪である。ゾロメキ発電所付近で日が暮れた。やっとのことで馬場島小屋に着く。小屋は救助隊でゴった返していた。

遭難パーティは、早月尾根上部（剣頂上）、小窓尾根、赤谷尾根、毛勝山の4か所におり、県警の救助隊が向かっているのは赤谷尾根だけで、他は手が回っていないとのこと。早月尾根上部にはS山岳会4人、R山岳会7人、京大5人、D山岳会5人の4パーティ21人が合流して雪洞を掘っているとのこと。R山岳会は4日に下山を試みて3人が東大谷に転落、一人は自力で這い上がり稜線まで戻れたが、他の2人は途中でビバーク、リーダーのK氏は意識不明、他の1人は凍傷とのことである。D山岳会は小窓尾根隊の隊長が池ノ谷に転落して行方不明、他の2人も凍傷がひどいらしい。さらにA山岳会が下山を試みて途中で立ち往生、現在2600m付近にいるとの情報も入った。剣頂上の連中は8日朝まで食料を食い延ばす予定、燃料はまだ余裕があるとのことである。一方、D山岳会の救助隊6名が今日、1900m付近までテントを上げて、今日はそこに泊っていると報告された。馬場島は標高700m程度であるから、このドカ雪の中で1日に1200mも登ったことになる。驚異的である！

他の状況は毛勝山でB大が行方不明、救助隊は馬場島からは向かっていないので詳細は不明、赤谷尾根にはC大が孤立しており、食

料が尽きて動けないらしい。小窓尾根には AACK のコッペと三平の 2 名を含む 3 パーティほどがいるが、AACK の 2 名は救助不要とのことで、自力で下山した。K 山岳会 8 名は 1600m 付近で消息を絶っているらしい。他にも大日岳に数パーティがいるらしいが、こちらは何とかなっているようだとのこと。

小屋にやけに人がゴロゴロしている。救助に行きたくても行けずにここに留まっているという感じである。警察から「京大さんにシラカワという人がいますか」と聞いてきた。「いや、いませんが」、「ほな、そんな風の名前の人は?」、「ああヒラサワという名の部員がいますが」、「シラカワさんかヒラサワさんか分かりませんが、その人が手に凍傷をおっていてひどいとのことです。」。えらいことになってきた。各隊のリーダーが警察を交えて行動予定を話し合った。木村 OB が会合から慚然とした顔で戻ってきた。結局、なにも決まらなかったとのことである。幾つかの山岳会と共同で救助活動を行ったのは、京大にとってこれが初めてではなかったかと思う。他隊との調整に当たった木村 OB は、かなり苦勞をしたようである。

1969 年 1 月 7 日 雪

とにかくひどい雪だ。木村 OB は京都との連絡のため馬場島に残る。D 山岳会 5 人、R 山岳会 6 人、京大 5 人の 16 人で出発する。湿雪でたちまち体は濡れていく。D 山岳会先発救助隊の昨日のトレースはわずかにしか分からない。トレースを外すと輪カンジキをつけているのに楽に腰までもぐる。傾斜のきついところでは空身でラッセルしても 1 回に進める距離は 10m がやっとである。R 山岳会は輪カンジキを持ってきたのは一人しかおらず、他はアイゼン着用であった。アイゼンでのラッセルでは肩のへんまで埋まり、ただもがくだけで進まない。結局、D 山岳会と我々でラッセルをする。1300m 付近で D 山岳会先発隊のテントに着いた。昨日、1900m 付近まで登ったという驚異的な記録は、実は 600m ほど登ったというのが正確な話であった。さてここに泊まった D 山岳会はと見れば、テントからすぐ目の前にいた。彼等は朝からかかって、たったのこれだけしか進めなかったのか。多分、疲れて今まで寝ていたのであろう。

我々と一緒に来た D 山岳会二次隊は、彼等のテントを撤収しだした。それで泊まりの D 山岳会一次隊 6 人と我々 5 人の 11 人で交替でラッセルに当たる。我々は太く短くラッセルをやるが、D 山岳会は細く長いラッセルで一向にピッチが上がらない。我々の荷は平均 26kg ほどであるが、彼らは 20kg 以下である。食料等を二次隊に任せためらしい。15 時半頃、テント設営にかかる。高度 1600m 付近である。D 山岳会 6 人、R 山岳会 6 人、京大 5 人が泊る。

1969 年 1 月 8 日 雪

相変わらず雪がしんしんと降る。R 山岳会隊は輪カンジキを持たないのでラッセルは D 山岳会と我々で行う。先頭は空身でラッセルして交代後、荷を取りに戻るの繰り返しである。だいたい腰までのラッセルであるが、ところによって胸まで達する。急傾斜のところでは頭の上の雪をピッケルで崩して登る。それでも快調に進み、標高 1900m 地点にある避難小屋に達したのは 11 時ごろである。雪に埋もれた避難小屋を掘り出して中に入る。天気は相変わらず雪であるが、空が明るくなりだしたので好転していると予想した。しかし頂上のパーティはそろそろ食料が尽き始めるころである。許可を得ていたので小屋の中にボッカしてあった食料を開ける。一休みした後、D 山岳会はさらに進んでテントを張るといふ。我々は荷物を上にデポして、泊まりはここにすることにした。R 山岳会も我々と同行して荷物を上にデポするといふ。小屋を出てほとんど我々だけでラッセルする。2000m 付近で D 山岳会が残しておいたテントを発見、彼等が今夜泊ると言っていたのはこのテントのことらしい。2200m 付近に荷物をデポして小屋に戻る。雪は小降りになってきた。

小屋に戻ってびっくりした。大変な人である。D 山岳会の応援部隊、R 山岳会の助っ人、A 山岳会、そして京大の第二次隊である。皆、今朝、馬場島を出発して我々のトレースを使うことで、一日でここまで来れたらしい。小屋はごった返しで、寝るときの窮屈さはありやしない。

1969 年 1 月 9 日 小雪、のち晴れ

相変わらず上空はガスであったが、下界が見えるようになってきた。天候の回復を示してい

る。朝からヘリコプターが飛んでいる。高度の低い赤谷尾根に対しては早速何かを始めるのかもしれない。足の具合が悪いという一人を二次隊に残し、二次隊から矢吹、米本の2名を補充して6名で出発する。荷物の大部分を二次隊に託したので、今日は荷が軽い。先発したA山岳会のラッセル跡を使って直に2300m点まで登る。この辺りから雪は風で飛ばされておりラッセルの必要はなくなった。アイゼンに履き替える。驚いたことにA山岳会は5人中、アイゼンを持ってきたのは2人だという。慌てて出てきたとはいえ、輪カンジキがなかったり、アイゼンを忘れてきたり、なんと間の抜けた話である。結局、この後はD山岳会とR山岳会と京大隊が進む。ガスの中でようやく2600m点に着く。ここにテントを張ることにする。R山岳会3人が救援食料を持って頂上に向かうと言うので、D山岳会と京大隊は彼らのサポートと食料のデポを行うこととした。二次隊が追いついたので彼らにテント設営を頼んで我々も頂上に向かう。

フィックスザイルを張りながら進む。駒草ルンゼの上までで我々手持ちのザイルがなくなった。後は食料をここまであげるだけなので、自分と三田村の2名は先にテントまで降り、ハラ、天外、矢吹、米本の4人がさらに先まで偵察をすることにした。テント地は風が強い。コーヒーを作って皆の帰りを待つが、なかなか帰ってこない。空は晴れだしたが日が暮れ出した。心配になる。やがてD山岳会、続いて京大隊が帰ってきた。「おい、頂上まで行ってきたぞ!」、「え! ホントか。それで皆は元気か?」、「おお、みんな元気も元気」、「クーラ(ヒラサワ)はどうだった」、「別に何ともない。ちょっとした凍傷だが、たいしたことはない」。それから頂上でオヤマ等会っての色々な話を矢継ぎ早に聞かせてくれた。駒草ルンゼで我々と別れた後、少し上のシシ頭の上でA山岳会のテントを発見したそうである。そこに居た彼らの話では今日、東大谷に人影らしきを見たという。ならば行方不明のR山岳会の2人はまだ生きていたのか。それで頂上に向かう予定であったR山岳会3人はA山岳会のテントに泊まることにし、代わって京大隊4人が頂上へ食糧補給をすることになった。16時ころ頂上に着き感激の再会になった。頂上に閉じ込められていた連中の絶食は1

日半で解消した。

1969年1月10日 晴れ

風はやたらと強いが快晴である。まるで戦争でも起きたかのように飛行機とヘリコプターが来襲する。うるさくて仕方がない。取材のヘリなのか。さあ出発だと張り切っていたら第三次隊からの指令があり「今2400m点にいる。我々を待て。」という。何故なのか分らないが仕方がない。他のパーティは続々頂上へ向かう。自衛隊の大型ヘリが2600m点のテント地まで飛来して食料と思われる包の投下を行った。全て東大谷か池ノ谷かに落ちて行ってしまった。強風の中、あんな狭い稜線上に投下を成功させるには神技以上の技量が必要である。ヘリコプターの操縦士にとっても物凄く難しい操縦を強いられる。一步間違えれば稜線に叩きつけられかねない。我々にとっても音がうるさく会話ができない。それでなくても風が強いのにヘリコプターからの強い風にまであおられて、厳しい稜線にいる我々に危険極まりない状況を作りだしている。少し考えれば全く意味の無い迷惑なだけの危険な作戦であることぐらい分りそうなものである。誰が立案し命令したのか。少なくとも剣の稜線を知っている山岳警備隊ではないだろう。

やっとOB主体の第三次隊が来た。救助隊とフィックス工作隊に分け、自分はフィックス工作隊に入る。風が強く吹き飛ばされそうである。テント地から次のコブの降りにリュックサックが3個ほど放置してある。P岳友会が放棄したものらしい。P岳友会の1人は東大谷に転落して行方不明になっているとのことであった。駒草ルンゼ上部でフィックス工作は終わる。頂上からまずD山岳会が、次いでR山岳会、S山岳会、そして京大隊が降りてきた。青空を背景に雪煙を上げている雪面をしっかりと足取りで降りてくる。R山岳会の2人を除いて救助隊を含む全員、駒草ルンゼ上部まで到着する。県警警備隊の警官1名が登ってきたので下界の情報を聞く。下では大騒ぎらしい。下山にかかる。いったん2600m点で集結し、2400m点まで降りる。ここまで来れば危険な場所はもうない。ゆっくりくつろぐ。昨日までの連日の大雪が嘘のように快晴である。小窓尾根が美しい。R山岳会救援隊は行方不明2人を求めて、ここ

に残る。オヤマパーティは何人か顔面凍傷にかかっていたが、荷物を背負って自力で下山できるという。クーラの手の凍傷もたいしたことはない。いつのまにかヘリコプターの騒音も止んでいた。避難小屋で再度全員集結して、あとは隊ごとに分散して馬場島へ向かう。緊張が解けたせいかスッテンスッテンと転びながら。馬場島にはOBのザッカス、谷、ダンナも来ていた。ダンナは医者であるので凍傷者は早速手当をしてもらっていた。京大隊はD山岳会が借りていたバンガローに入る。夕飯は実によく食べた。オヤマはマスコミの取材攻めである。

劔岳頂上での状況は次のようであったとのことである。京大隊は12月27日劔御前小屋に、1月2日劔岳頂上に着き、直下に幕営した。3日、R山岳会、S山岳会、そしてD山岳会が次々に京大隊テントに到着した。D山岳会(小窓隊)はリーダーが池ノ谷に転落・行方不明、残った5人が頂上にたどりついたとのこと。各隊間で協議した結果、食料、燃料、寝袋等を失っていたD山岳会5人をR山岳会で2名、S山岳会で1名、京大で2名、分散収容することにした。5日(馬場島では4日と伝えられていた)、R山岳会は下山を強行し、3人滑落、戻ってこれたのは1名だけである。この事故で頂上に戻れたR山岳会5名も食料等、装備のかなりを失ってしまった。5日夕方、救助隊が向かっていることを知り、救助待ちを決定、食料を再配分したとのことである。行方不明になっていたR山岳会2名は、後に雪洞の中で発見された。食料は若干残っていたが燃料の入ったザックを流してしまっただけで、そして傷と疲労とで雪洞も体がやっと入る程度しか作れなかったらしい。結局、劔周辺だけで、K山岳会8人行方不明、D山岳会1人転落・行方不明、P岳友会1人転落・行方不明、H高校OB隊3人行方不明、R山岳会2名とB大4人は死亡確認という劔登山史上最大の大量遭難であった。

夜、小屋は無事下山を喜んで大騒ぎであった。県警警備隊の警官一人が京大隊の酒盛りに参加した。折しも東京では学生運動が過激化し、彼も機動隊として東京出張が命じられるとのことである。「私は天皇陛下万歳です。必要があればあんな奴らをけ散らかして見せます。」と酔った勢いで叫んでいた。話の内容はともかく、面白い気持ちの良い人であった。皆、彼の話到大

笑いである。

1969年1月11日 曇、後雨

馬場島から見上げる劔は素晴らしい。マッチ箱、小窓の頭、小窓の王、劔尾根、劔尾根の頭、劔頂上と、岩峰がそそり立つ。あの素晴らしい山中に幾つもの遺体があるとは想像できない。京大隊は今や総勢30数名になっており、長い長い隊列を組んでの下山である。京大山岳部の層の厚さを感じた。入山時とは打って変わって山は穏やかであった。釈泉寺に着いた頃から雨になった。山は再び荒れるだろう。

【あとがき】

2004年にNHK「プロジェクトX」で劔大遭難救出劇の放送がされたとき、この大騒ぎを当時見聞きした京大山岳部OB達も懐かしく番組を見られたようである。そして京大山岳部関係者で作っている「笹ヶ峰会」のeメールに番組や、当時のことを思い出しての感想などが多く寄せられた。その中で以下のような質問があった。

「日本の冬山でこれほどの遭難者が出たのはどうしても腑に落ちない。大雪では水蒸気が氷結する際、大量の潜熱を出すため、気温はさして下がらないはずである。冬の劔も京都の北山とさして気温は変わるまい。また3000メートルの高山といっても岩稜がむき出しになっているのはたかだか頂上から500メートル程度までであり、3時間ほど天候が回復すれば下山にさしたる困難はないはずである。にもかかわらず大量の死者や救助要請パーティを出したのは、稀に見る大雪のためだけとは考えにくい。」

この年の劔一帯の降雪はものすごく、視界は極めて悪かった。降り続く雪はどこで雪崩を起こしても不思議でなく、あの状況の中で強行下山をするのは無謀であることは容易に判断できなければならない。天候が回復するのを待つに限る。雪は凄まじかったが、OBが指摘するように降雪中の気温はそれほど低いとは感じなかった。馬場島では湿雪で、これはこれで悩まされた。

問題は、天候が回復するまで、何故じっと待つことができなかつたのかだと思う。遭難パーティの力量・判断力が低かつたのだろうか。力量が低いパーティも多かつたようだが、遭難者

の中には雪山経験豊かなレベルの高い方も含まれており、レベルだけの問題でもなかったと思う。実際、動かなかった（あるいは動けなかった）隊は赤谷尾根のC大ですら全員無事救出されている。冬の日本海側の山で、10日間近く荒れることは珍しいかもしれないが決して稀ではない。6年前には三八豪雪、2年前（1967年）の正月の笹ヶ峰スキー合宿も10日間が悪天であった。冬の剣に挑む人間がこれでお手上げになるようでは失格である。一般に社会人パーティは予備日数が少なすぎる。当時流行ったのがラッシュアタック法とかである。すなわち重装備で日にちをかけて挑むのではなく、装備を極力軽量化して機を見て一挙に頂上を狙うというやり方である。このためテントは持たずツェルトで代用する、燃料はすべて固形燃料にする、携行食料は最小限にするなどである。ラッシュアタック法は時間的余裕のない社会人パーティにもてはやされ、これが新しいスマートな登山法であると信じる風潮が広まっていた。この方法は一種の奇襲作戦であるから、“機を見て”が正確にできることが大前提である。とこ

ろが正確な判断ができない、しないまま自己過信で勝手読みし、そのまま核心部に突入、あとは引くに引けず、成るように成るといった典型的な状態にしばしば陥いる。第二次大戦での日本の軍部の行動そのものである。人は冷静に状況判断をするということが誠に不得手なようである。

編者注：

オヤマパーティーの計画概要は以下の通りであった。パーティーは5名で、構成（回生）は、5, 3, 3, 3, 2。扇沢から黒四ダムを経て入山、黒部別山南尾根から真砂岳、剣御前、別山尾根から剣岳登頂、早月尾根下山。1968年12月17日入山、実働10.5日、予備13日、最終下山予定日は1969年1月9日であった。

この時の黒部別山南尾根は、12月としては初トレース。12月～1月に亘る黒部別山南尾根～剣岳縦走は、初トレースである。

以上の情報取りまとめにご協力いただいたオヤマパーティーの前田栄三さん、芝田正樹さん、近藤未知男さんならびに京都大学山岳部・小林詩月さん、ありがとうございました。

高校生と教師が創った山岳部 60年

上田 豊

1. 創立60周年を迎えた高松高校山岳部

1958（昭33）年、香川県立高松高校に山岳同好会ができた。わたしが入学する前年のことだ。京大山岳部には洛北・鴨沂高校（旧制京都一中）や六甲学院の山岳部出身者が多かったが、創立はそれぞれ1915（大4）年、1939（昭14）年と古く戦前にさかのぼる。高松高校（高松たかこう）の場合も旧制高松中学時代の昭和10年前後に、熱心な教師と生徒10数名で登山していた「杞山会」というグループがあった。

高高山岳部は戦後10数年を経ての誕生で、マナスル初登頂の2年後、チョゴリザ初登頂の年になる。創立60年の歴史のなかで、部員わずか数名の存続危機もあったが、いま卒部生は約400人、現役生徒も22人いて、四国の山を中心に活動を続けている。

大学山岳部出身の方々には、登山を始めた原点が、大学入学以前にある方も多いただろう。わたしの場合は高校時代にその原点があり、高

山岳部出身者の多くも同じ思いを共有しているはずだ。そこには、創部から20年間、さらにその没後もわたしたちを引きつけてきた、ある教師の存在が大きい。

2. 新任教師と生徒たち

1958年、県内一の進学校・高松高校に、広島大学を出たばかりの西村信重という英語教師が赴任した。ガリガリに痩せ、髪はボサボサで無精ヒゲを伸ばしていた。（翌年入学したわたしの印象では）見かけはいつも不機嫌そうで顔色もさえず、低く太い声で必要なことだけをぶっきらぼうに話した。無愛想でニヒルな感じの内側に何かありそうな・・・だが教師としては、ややガラがわるいように感じられた。

そんな人柄に型破りな魅力を感じた当時2年の悪童グループが、6才程しか離れていない西村先生の下宿を、郊外の田んぼの中に訪ねるようになった。自称・悪童（故・香西俊紀さん）



写真1 讃岐山脈・竜王山で新人歓迎山行（1959年6月7日）
後列左端に立つ西村先生。右端に座る学生帽は高校1年の上田（岡泰夫さん撮影）

の回想によると、大学で山岳部にいた先生は、ある日いつものようにウイスキーを飲みながら、高高に山岳部が無いことを悔しがった。「山に登る奴はおらんか」「それでは創りますか」・・・あとは話が早かった。

この年の10月に山岳同好会が創られ、香川・徳島県境の目ぼしい山を次々と登っていった。11月には会誌『岳樺』を創刊。その編集後記は、「僕たちは千五百人の為の山岳部をモットーにしている」と全校の生徒数をあげて締めくくられている。

これらの実績をもとに、翌年4月に開かれる生徒自治会に向け、1期生たちは地道で周到な準備をし、山岳同好会を「部」に昇格させる議題を潜り込ませた。西村先生は、授業中にも山の話で入部を勧誘しながら、自治会委員の生徒1人1人をつかまえて言った。「山岳部昇格に賛成せんかったら、お前の英語の単位はやらんぞ！」目元は笑っていたそうだ。

こんなことを知らず、高高入学当初に同好会員になったわたしは、5月には山岳部員になっていた。この昇格により、山岳部は部費と部室を獲得した。それでも装備をそろえるには足りず、校舎の床の油拭きを請け負ったりして、部費調達に努めた。（写真1）

3. 「三嶺」登山

創部当時、徳島・高知県境に三嶺（みうね／

さんれい1893m）という美しい山があることを誰かが聞いてきた。高知県側からは稀に登られているが、徳島県側からのルートは未開拓だった。

1959年7月、2年生4人が徳島県側から5日間かけて偵察し、苦闘のすえ頂上に達した。それを受けて三嶺が創部最初の夏山合宿の山となった。8月初旬、3年生5人による剣山～三嶺縦走も苦しんだすえ成功した。その数日後、合宿は顧問教師など5人、男17・女5人の生徒が参加して始まった。

初日、台風の豪雨の中、貸切バスが祖谷溪谷の細道で前進不能となるが、人と荷を名頃小学校分校になんとか集結。計画の大幅な変更となる。翌日も豪雨の中、剣山をめざすが、あと1時間半で引き返す。翌日は午後から、西村先生ら4人と男生徒8人で最初の三嶺登山にかかる。初めてのルートに難渋し、雨中のヤブこぎのすえ18時、撤退を決定。泥だらけの下降の中、見えてきた星が美しい深夜12時、なんとか名頃に帰着した。

夜が明けた8月10日、全員で再び原生林に分け入った。地元案内人の助けを借り、道なき道を踏み分け、全員が登頂。山頂下の草原にテントを張る。雄大な眺望、ブロッケン、夢のような夕焼け、星空のもとでキャンプ・ファイア・・・わたし（たち）は、山に魅せられてしまった。（写真2、3）



写真2 三嶺山頂下・キャンプ地の朝
(1959年8月11日)

これを契機に三嶺登山は部の主要山行となり、歴代部員の多くにとって最も思い出の深い山となっていった。今でも夏には、現役生とOBとの合同登山がつづいている。

三嶺登山や当時の部活動を通して、高1だったわたしにとって、山岳部1・2期生にあたる上級生は、自主性にあふれ頼もしく優しく素晴らしい兄貴分であった。高高山岳部の誕生とその後の力強い道ができたのは、かれらと西村先生との出会いがあってこそであろう。

『岳樺』創刊号で西村先生は、「山そのもの」と題してこう書いた。

(文中の・・・は省略箇所)

「本会の誕生は、僕自身にとっても近年にない痛快事である。・・・僕が最もうれしく思うのは、山を歩かんとする若者が意外に多く、その意志が固いことである。・・・然し山には山の厳しさがある。・・・もし本会員中にこの厳しさに対する厳しさが失われたとき、世俗一般のブームに迎合するが如き気風の生じたとき、学生マウンティニアとしてのプライドが失われたとき、僕は本会はその存在意義を失い各会員は結局山には無縁の人間であったと結論し、よろしく結末をつける覚悟である。・・・杞憂であることを信じる。何故なら僕は、山を歩くことがすべてを解決することを知っているからである。山はそれほど大きい。」



写真3 三嶺の下り道で昼食休みの女生徒たち
(1959年8月11日)

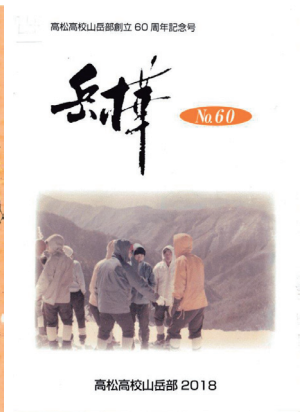


写真4『岳樺』創刊号(1958)と山岳部創立60周年記念60号(2018)

4. 部誌『岳樺』

ガリ版刷りで始まった『岳樺』は、8号から活字版になった。表紙デザインは号毎に改まり、8号までは版画刷り、45号からフルカラーとなった。毎年途切れることなく、今年60年目でキッチリ60号が発行された。現在は全号の記事が、インターネットで閲覧できる。(写真4)

誌名について、西村先生による次の文が毎号の奥付に掲載されてきた。

~~~~~

「岳樺」について

「ダケカンバ」と読む。

2,000メートル近く白樺とハイマツの間に生ずる。ダケカンバは白樺の小さいのを想像していただければ良い。白樺ほど世俗的で感傷的でもなく、ハイマツほど詩的でもない。

朝霧りの中をベイスキャンプを発って白樺と熊笹とブナの林をぬけて、やがてザックの重みが肩にめりこみ始めた頃、汗がひたいを流れ始めた頃、ダケカンバの林に入る。その木を見た時登山者の心臓は高鳴り、山に来たことを痛感する。そして心身のひきしまるのを感じる。

予定の山行きを果たして、美しい幸福感に満ちて山を下りる時、ダケカンバの林に入った時、吾々は思わず去らんとする岩峯をかえり見る。凍りつく様な夕焼けの山頂、ダケカンバの緑、登山者は涙して山を下りる。  
・・・・・・美しい木である。

~~~~~

毎号の扉には、次の短歌（斎藤史）と献辞がある。

「山なみの 白き信濃に 住み古りて
凝らしたる眼を 何に閉じなむ」

「心して 美しき晩秋の 今日 このささやかな
一冊を 顧問、OB の諸氏及び日頃の数々の心
労へのわびとして わが父母に捧げる」

これらの文は、卒業後も新たな号を受け取るたびに心に浸みたが、西村先生が号毎に書かれた文章に、わたしたちは詩情にひたり、また刺激されてきた。

5. 教師が残した山ぐつの詩

『岳樺』の毎号に「山ぐつの詩」という章があり、現役部員の思いがつつられている。生徒たちの間では西さん（ニッさん）と呼ばれた西村先生が残してきたものは、わたしには、山ぐつの音がひびく詩のようにも思える。

『岳樺』も19号（1976）になって、やせた青年からいつの間にか太り気味の中年になった西さんは、「一筋の白い流れに」と題した一文を寄せた。その最後は、こう締められている。

「20年目。それはやはり一つの節です。その直前に流れに背を向けることは、これは考えてみると天の叡智。新しい酒は新しい皮袋に。新しい流れのための起点には新しい核を。朝さんを中心に、一枚の岩となるであろうOBを背景にして、現役青二才共の一筋の白い山の道が限りなく続かんことを。」

西さんは1976年秋、新設の県立高松西高校に、学校立ち上げの重責を背負って転じた。超多忙な時間が過ぎるなか、1979年2月、自宅近くの路上事故で急逝。43才だった。

『岳樺』に掲載された西さんの寄稿は、21号（1978）が最後となった。題して「評論家を拒否せよ」。その後半部には、こう書かれている。

「要するに歩くことだ。OBたちよ、そしてくちばしの青い現役たちよ。のみ込まれそうな山の夜の闇の深さと、隣りの奴の体温しかない

夜の痛さを味わうことだ。・・（省略）・・山はことばではない。世にあふれる醜悪な空言を拒否せよ。自らの存在をかけて評論家を拒否せよ。

～冬の予感の中の信濃路にて～

『岳樺』は20号が創立20周年記念特集号になるはずだった。だが、22号（1979）の西村先生追悼集へと姿を変えた。そこには、山々での20年間にわたる生徒や先生の思い出深い写真の数々、毎号載った西さんの寄稿文、顧問・OBらの思いがこもった追悼文が集められている。そして、三嶺山頂直下の岩には追悼の銅板がはめ込まれ、根元には遺骨の一部が埋められた。

毎年1月2日には高松でOB総会が開かれているが、有志は当日、瀬戸内の島々を望む西村先生の墓にお参りを続けている。西さんが居た山岳部20年のあとも、その2倍にあたる40年の歳月が、かれを直接知らない世代によって累積されてきた。そしてさらにこれからも続こうとしていることを思うと、感慨深いものがある。

6. それぞれの山

西さんはOBに年賀状を出す際には、「部室に手紙を出してやってほしい」「部室を訪ねてやってほしい」と書き添えていた。

1964年、京大山岳部の3回生だったわたしは、アンナプルナ南峰の初登頂をめざす現役中心の隊に参加できることになり、西さんを訪ねた。部旗を持たされたわたしは、頂上で旗をかざした写真を撮った。帰国後に訪ねた際も、よく憶えていないが行く前と同様、いつも通りぶっきら棒だったように思う。

西さんがわたし（たち）に、ヒマラヤをめざせ、未踏をめざせ、と言ったり書いたりした憶えはない。だがのちに『岳樺』7号（1964）を見ると、アンナプルナ南峰に初登頂成功の報道が入った瞬間に部室に居合わせた人たちの声が、特報として載っていた。先頭には西さんの声。「今晚のみに行くと阿部よ、富田さんに伝えておけ。あいつが成功したか。今度は誰だ。佐藤か頼富か。30年計画が近づいてくる。」

30年計画とは何のことか？（高高OBによるヒマラヤ登山隊派遣？）とにかく、喜んでくれたようだ。（写真5）

『岳樺』13号（1970）で、西さんが「OB諸氏に」と書いたなかに、こんな文がある。

「そう言えば一良は今、ネパール。・・・・自分



写真5 ガネッシュ（アンナプルナ南峰）の中央峰頂上にて（1964年10月13日）
京都大学山岳部隊の木村さんと上田（右）
（背景はアンナプルナI峰南壁、吉野さん撮影）

の足で自分の道をまさぐりゆく男。・・・上田がひょっこり、このうすよごれた部屋に・・・相変わらずのヌーボーとした歩き方で、内陸旅行の話、オーロラの話、そしてあと何年か越冬しなければ完成しないという彼のテーマの話。上田がノッソリと帰って行ってから・・・金沢が帰ってきました。Mt. ロブスンの登頂記録を持って、・・・

炭焼きの煙のまねして、馬鹿みたいに四国の山ばかり13年間はいまわっていたら、結構まわりには本物がいっぱいになりました。・・・阿部や長尾も・・・それにもまして、現在の現役が有望です。

面倒くさいと思わずに明日は必ず500円送ってください。」

500円は当時の年会費のこと。本物という分け方は、わたしには抵抗感があるが、それはここでは置いておこう。

文中にある佐藤一良（1962年度卒）は、「浪人せずにヒマラヤに登る実力を持った大学に入りたい」と西さんに言った。1週間ほどして、大阪市立大へ行けと勧められた。そうしてのち、1970年11月、佐藤は未踏のカンジロバ主峰の頂上に立ち、涙を流していた。西さんの喜ぶ様子が思い浮かんだという。

佐藤は高高山岳部に籍をおいてなかったが、

3年のある日、西さんから「お前は今日から山岳部員ジャ」と宣告されたそうだ。卒業後、高高山の現役部員の面倒を見ろと言われたと、かれは受けとった。1989年に大阪市制100周年記念事業でチベットの四光峰初登頂に成功した隊では、隊長だった。

同じく文中にある金澤健（1963年度卒）は、わたしが居た名大の研究室を何度か訪れた。氷河研究のため収集されていたヒマラヤの写真で、登攀ルートを検討するためだ。1979年クスムカングル、翌年にはバギラッティI峰の初登頂をはたす。1977-95年の間、八千メートル峰をはじめ海外の登山に毎年でかけていた。

佐藤は2008年、金澤は2010年に病没する。

山で逝ったOBは徳繁公一（1973年度卒）が穂高岳で1976年、二俣勇司（同）はクラウン峰で1992年、西さんが「コサックの子守歌」を教えた長谷伸宏（1974年度卒）は、ガネッシュIII峰、ダウラギリI峰のあと1983年ヒマルチュリで。わたしは1973年、ヤルン・カンから何とか生きて帰ったが、拙著『残照のヤルン・カン』の刊行は、西さん急逝の半年後となり、読んでもらえなかった。

高高山岳会としても、会からのヒマラヤ遠征隊派遣をめざしていた。それは1971年、ネパールのティリツォ湖地域の2隊員による探査で始まった。以降もトレッキング隊が出て、その都度『岳樺』をかざっている。

~~~~~

西村先生は、山の旅人として、浸みとおるような詩情をもって、当時の高校生を山の魅力に染めてしまった。それが原動力となって、卒部生たちのそれぞれの山が展開していったように思う。

そうして60年、変動する社会・教育・学生環境のなかで、高高山岳部がこの間、活発な部活動を維持してこれたのは、歴代40人近くにおよぶ顧問の先生方が努力してこられたからだ。そして、累積400人におよぶ卒部生の山への思いがあつてこそであろう。

OB山岳会の活動に献身的なOB、現役部員の山行に同行する面倒見の良いOB、自然との様々な触れあいのなかで、（意識するしないに関わらず）高校時代の山の体験が今も生きているOB、それぞれの山が融け合つて、西村先生が書いた、一筋の白い流れ、になっているような気がする。

## 第45回、第46回雲南懇話会のご案内

第45回雲南懇話会を以下の通り開催いたします。

日時：2018年7月7日（土）13時～  
会場：東京慈恵会医科大学講堂（東京・新橋）

また、第46回雲南懇話会を以下の通り開催いたします。

日時：2018年9月29日（土）13時～  
会場：東京慈恵会医科大学講堂（東京・新橋）

## 会員動向

### 逝去

毛利 哲

### 会員異動

石本恭子 勤務先変更  
加藤恵美子 勤務先変更  
窪田順平 勤務先・自宅変更  
富永浩三 勤務先削除  
六車光貴 所属・自宅変更  
宮坂実 自宅・電話変更  
山本紀夫 電話・メール変更

## 編集後記

福井県や石川県の大雪に対し、高田はほぼ平年程度の積雪でした。山の雪はというと、妙高や立山でも少なめだったとのことで、この時期の残雪も少なめようです。

大雪の中での遭難救出劇から約50年、冬の剣岳は、気象条件によっては世界でもきわめて厳しい登山になるのではないかと思います。私は当時2回生、日高を下山して帰省したところへ呼び出しがあり、中島ダンナさんのカバン持ちとして馬場島まで行きました。大勢の賑やかな帰り道を思い出します。

第85号は、おかげさまでバラエティに富む内容となりました。ありがとうございました。会員の皆様には、貴重な経験や記憶をのちに伝えるため、ぜひご寄稿をお願いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2018年7月16日  
原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2018年5月31日  
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎  
発行所 〒606-8501  
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究  
研究科 竹田晋也 気付  
編集人 横山宏太郎  
製作 京都市北区小山西花池町1-8  
(株)土倉事務所